

がポツダム宣言を受諾したんだということを聞いたのは八月十五日で、わたしたちは羽地におりました。自分たちがすく川というところに行つてからは、米軍はどっちかという友だちみみたいな感じがしましたね。

むしろ恐いのは日本軍ですね。その頃まだ友軍と言っていましたよ。自分たちの親父連中がやられた後もですね。彼等も、米軍よりは日本軍が恐いんだと。

おやじがそういう目にあつたのを知つたのは、亡くなつて二、三日もしてからかね。ちょうど渡喜仁あたりの人々全部湧川のたよりを頼つて来ておりましたのでね。それから伝え聞いたわけですよ。それで早速、自分は古我知に伯父(比嘉善雄)がおりますんで、アメリカ帰りますから恐らく伯父はやられるんじゃないかと、すぐ人を使ひに出して、これはこうなつていゝから、伯父の場合もアメリカで教育を受けて来た者であるし、次は危いぞと。うちのおやじは、あの頃も産業組合してましたね。産業組合関係、役所関係―人事の關係をみんなやつておりましたんでね。長期戦になるといふことは予想したんでしようね、恐らく。だからあつちこつち避難してゐる住民たちに、今のうちに増産しようじゃないかと呼びかけたらいいですね、確かに。それが結局ウラに出たんじゃありませんか。それでやられたと思ふんですがね。

あの当時は、日本軍の連中とベッタリの女の人もいたようですがね。もしかしたら、その女の人からの密告もあつたんだろうといふことを後で聞かされたわけですがね。この人も実際に今、中部の石川辺にゐるといふことですよ。肝心なことになるとこの人も、わた

のはもうまたとはつくつてもらいたくないですね。

うちのおやじ連中のことを、後で祖父から聞かされたわけですが、夜、藪畑に引き出されて行つてとり囲んでた。相手は五、六名だつたらしい。何の抵抗したあともなく、バツサリやられたらしいですね。別にそうされるというのを全然予期はしてゐないもんですから。今まで村のために尽くして来た人だし、また応召される方々の見送りとかそういうものも、在郷軍人の会長でもあつた關係で、みんな一手に引き受けてきた。それはもう村の守護兵であつたわけですから、そういうふうな面でもなにか協力要請に来たのじゃないかぐらいに考えたんじゃないですか。まだ四十何歳かですから、まだまだ充分働ける年であつたわけですよ。キホウというのは、初に呼び出されて一緒に出ていつたらしいんですがね。何名かグループをつくつて、あつちこつちリストにもとづいてやつていたんだそうですね。

何の抵抗もできない人々をこゝうふうにやつたといふあの当時の友軍といふものは、憎んでも憎みきれないといふんですかね。あの頃の人々の一般の考えからすれば、戦争に負けるといふたような考えは毛頭なかつたわけですからね。それが、あにはからんや戦局はそうじゃないと、実際追いつらされてゐるんだと。そうなるといふとこれらの人々の考えにしても、やはり友軍にちよつとこゝう同情してゐる面もあつたと思ふんですよ。自分たちも被害者でありながら、そういうたようなことは顔にも出さずに、ご苦労さん、ご苦労さんで通したわけですからね。それにそういうたような中で、相次いで残虐な行為が起つたもんですから、これはいかんといふことで

しに言わないんですよ。この人の話を聞いたという人々もたくさんゐるらしいんだがね。そのところもわたしには、どの程度事実であるかはつきりしないんですよ。うちのおやじの場合は、第一にあの頃の村の有志になりますし、農業関係とかそういうたものも手広くやつていたし、悪くいふなら、こゝら辺一帯ではどちらかといふとボス的な存在であつたかも知れませんな。そういうた面でも、うらみだつたかどうかはこれわかりませんがね。わたし、この兵隊を大分探し廻りましたよ。あれからですね、日本の軍隊に非常に嫌悪感があるのは。ちよつと十六、十七ですから、手榴弾一コ、二コ必ずわたし持つて歩いたんですがね、しばらくは。それらしき者がおつたらといふことを探したんですがね。とうとう、そういうたものは、時が解決してくれたんでしようかね。

自分が一番考へるに、あの頃の精神状態といふますかね、どつちかといふと正常じゃなかつたのですから。だれもかれも、どうせ米軍と相対したつて勝負はないんだし、ひとつのうつぶんばらしみだいな格好になつていたんじゃないかな。なかには、農家の人々のためにも日本の兵隊たちを連れて来て、畑を耕してあげたりとかいふ人々もおつたんですがね。それはまだ戦争が近づかないときにあつたんであつて、殆んどちりちりになつてからは、作物をせびりに来たりですね、物モライ同然ですよ。だいたい畑のある人は、友軍、友軍だといふことで、自分たちの食糧を減らしてでも彼らにものを持たしてやりましたんで、今後そういうたようなことがあるのかかわらない。これは自衛隊とかなんかとかいうことにもなりません、やはり一番肉親を亡くした自分たちにいわずれば、こうい

もう今から一番こわいのは友軍だといふたような考へができた。

当時、友軍といふたような言葉が民間に使われていた。やつぱり自分たちとしても懂れていましたからね。あの頃の教育の恐しさといふものですね。どういふふうな方法であれだけとけこんできたかですね、また実際に、自分が勉強している学校の中には、軍隊も駐屯してゐるわけだし。ぼくたち勉強の時期ですね、最後の追い込みをかけようといふことで、天底の図書館に宿泊して勉強したんですよ。十・十空襲のあとです。夜は合宿で勉強する、昼間は陣地構築といふふうな目の前で、実際に海軍の兵隊たちがゐるわけですからね。見るもの聞くものもすべて軍隊のものですし、自分たちはもう、勉強の合間合間、モールス信号を覚えたりですね、手旗信号を覚えたり、その中には応召で来たおじさんたちがおりましたので、その人たちの手伝いをしたりしましたよ。だいたい海軍では、みんな白石部隊なんかやつていましたけれども、司令室の方から信号灯を点滅させて、それを解読させるといふたようなものを毎日やつていました。おじさん連中も全部引っぱり出されてやつたんですけれども、こちらはまた頭のやわらかい十五、十六ですからね、解読の方法とかそういうのを少しおそれれば、あと解読するのはわけありませんからね。このおじさん連中はどうするのかと聞いたら、いま送られてきた信号を解読して、司令の方に通知するんだと、間違つたら打たれたりとか、もう妻子のあるおじさん連中ですよ、もう分らんと、君たちも手伝いしてくれんかといふことを言ふんですよ。自分たちもよしよしまかせておけと。やんちゃですからね、こゝうこうだといふことを紙に。ああ、みんなよかつた、ほうびをあげ

## 主婦の戦争体験（座談会）

今帰仁村今泊 玉城 シズ（四二歳） 主婦  
宮里 久子（三一歳） 主婦  
上間 明子（二八歳） 主婦

ようというって、ビタミンAの小さなお菓子がございましたよ、海軍のですね。それを戦闘帽の一杯もってきてですね。ああいったようなお菓子は食べたことがなかったですよ。先生方なんかになりますという、タバコなんてもう殆どない時代ですからね、先生のタバコだというんでタバコを持って来てくれる兵隊たちもいましたかね。この人たちはほとんど沖繩の人でした、聞いてみたら。おそらく微用かなんかで出てきた人々じゃなかったですかね。二水（二等水兵）ぐらいですよ、みんな。

あの頃の軍隊に憧れる教育、決してあれは急激にはやってきておりませんからね、知らず知らずのうちに吹きこんでいったんですね。これはもう、相当の罪悪ですよ。

うちはおやじの弟、その弟と結局、三名は戦争でやられたわけですよ。長男がうちのおやじでして、次男が警察の方にいたんです。水上警察のほうにいったんですよ。警部補でしたから、那覇のほうに行つて、その飛行機で連絡する途中でやられてしまったわけですよ。連隊区司令部に行つてですね、中支から一応帰つてきて、また、連隊区司令部に配置がえになってそこでやられたんですよ。三男の子で長男ひとりはおりますよ、渡喜仁の人、現在普天間高校の数学の教師で。三男の子は、人間の運、不運をみせてくれます。宮崎へ母子で疎開したのです。宮崎の空襲で、おんぶして防衛壕に入ろうとするとき、機銃掃射でやられて、子どもは助かった。人間の運、不運というのは大変なものです。戦争のために両親ともやられたんですがね。

そしてしばらくしたら、この辺にも来ましたから、そして機銃がはじまったから、これ大変というって、庭につくつている壕に入った。あの日は何も食べなかった筈です。子守りだけ。それから翌日も来るかと思つて、山に逃げてですよ。家にいた人もいました。わたしは二日位おつてよ。うちの息子が徴兵に、十五日に具志川の平良川に入隊というつてよ（沖縄県史8、P・三八〇参照）。十三日まで山におつて帰つて来て、十五日の朝、平良川の公民館に来なさいというつて通知がきていましたから。見送りする人もいませんよ。夜、親戚の人だけ来て、夜で顔なんにも見えないで、シマの二十一の徴兵検査の兵隊だけ。いつもは字民みんなで見送りよつたけど、ヌンドゥルチのモウで旗もつて見送つていたけど、あのときはみんな山にいたから、親戚の人だけ来て県道まで送つていった。わたしらは村までいこうといつたけど、ここでもう、というので。もう、ものも見えないで、誰も顔もみえないですよ。暗いときに。村にみな集合したら、誰もついていく人もいないで、こんな小さい紙片に行く先を書いてよ。一人一人歩いて平良川までいつてよ。引率も誰もいないで、自分で入隊したわけ。

わたしももう、気が済まないですよ。いっぺんは面会しないと気が済まない。あの当時乗り物も何もないですよ。トラックありませんけど、あつちまで面会に歩いてよ。

その翌年の一月、一月七日でした。ウンジャミヤのおばさんとフィチャーの仲宗根栄俊さんと三人で歩いていくことにしました。泊る目当てもないので、途中でアカがったところ（明りのみえるところ）いって泊るといって。こつちからで恩納から東廻りをし

玉城 十月十日の空襲の日にはここにいました。今泊では家が一軒焼けました。一軒は爆弾が落ちました。中原アキさんという、兼次小学校の炊事している世話人のアキさんの家です。そのうちの前の庭に。アキさんはこつちにいなかった。家は茅葺で、大きい家ではなかったけど。山羊なんかやられました。わたしたちは家の庭に防空壕を掘つて、砂地でしたけどいきました。防空壕は簡単なもので、かがんで入る位の穴にアダンの葉や土、砂なんか被っていました。入口には板なんかでおおうて入っていました。アキさんの家から百メートル位離れていましたが、防空壕の中の砂崩れて落ちましたよ。その日は昼じゅう、八時頃から五時頃まで空襲で、晩はやみましたから見にいきました。翌日は何もなかったです。家は茅葺だけ全部飛ばされて、板なんか釘が半分抜けていました。鶏なんか腸が飛ばされてカラになって。屋敷内には人がいないで、そのうちはみんなよその壕へいっていたので、人は何ともありませんでした。

わたしも、その朝ですよ、どつかでドンドン空襲の音がしたもんだから、あれは伊江島の演習であるといつてですよ、大通りに出たら飛行機がこうして（急降下のジェスチュア）降りるのがみえよつたですからね。演習であるといつてみんな立って見てるわけ。

で、今の何とかビーチ、うん、屋嘉までいつてよ。歩き通して。許田から明治山越えて、こんな小さい道でした。明治山越えて屋嘉までいって、屋嘉まで小さい道で、アダンの葉があるところから歩いてよ。屋嘉までいって、明りがあつたから、もう夕暮れているからあの明りの家へいって泊ろうといつて。行つたら、すみませんが泊るところないから、兵隊さんの面会に行くんだが、すみませんがいつたら、どうぞどうぞといつてよ。あのときは一月七日でした。ウヌピヤ、ヌン、ピンワシラン（その日はどうしても忘れられない）。それで入つていつたらよ。あの当時は新でお正月したんですよ。一月七日はナンカヌスクーで、本土では七草がゆですか、こつちでは豚の骨のシューシーマー（雑炊）で、三名ともみんなそれいだけいて、あーよかつたねーといつて。

こつちからは面会するのに、お菓子も何も買うものもないで、あの当時までモチ米つくっていましたからね。前の日、粉をひいてよ、モチ米でお菓子つくつてよ、自分のうちのコーガシをつくつて、それと油味噌、ながもちするといつて。それを弁当箱に入れて、隊長さんにも何かあげようといつて、余分につくつて。

翌日は平良川までついていきましたかね。平良川まで着いたら、またその部隊が、ずっと、具志頭の与座という山にいますよつて、いっぺんもいってこないところよ、与座まで歩いていって外間という部落にまだ明りついているところに着いて、二人で泊つて、一人のオジサンは息子は高嶺にいますといつて、一人のウンジャミヤのオバサンは越来から別れて読谷にいって。

途中で度々空襲に会いながら、途中、みんなに教えてもらいな

ら、あっちにいったら港川というところがあるから、あっちにいかない前に、役所があるから、こっちから山の方に行きなさいといって教えられて、その日は雨がふっていて、あのへんの粘土は、足にくっついて歩きにくくて。与座という部落に歩いていったら、山部隊はどの辺にいるかと尋ねたら、ずっと山の上にありますというので、また一人で山の上の部隊尋ねて、門番一門衛がいました。何々というけどいますかといったら、ハイいますよといって、その人は兵長の部隊さんが門で、おぼさん、息子はね、今日平良川に荷物運びにいったから、夜遅くしか帰らないから、こっちに知っている人がいますね、と聞いていました。わたしこんど、こっちははじめてです、知人はどこありませんよといったら、そうですか、それじゃ息子が帰ってくるまで、こっちに泊めておきましょうといって、この兵隊さんが部落に連れていってですよ、部落のうちに泊まっておきなさいよといって。またあしたの五時のラッパが鳴ったら、来なさいよといって、ハイといって、知らないうちに泊まってよ、うちの人もとても親切で、お風呂一兵隊さんがあっちで大きなナベに風呂もわかしてあって、風呂も入りなさいよといって、そっちで風呂も入ってですよ、そして晩に、九時頃に、玉城のオバサンといって、大きな声で、靴カバカバして来ましたがよ、息子はねえ、今帰ったばかりですから、あしたの朝、未明にあっちまで上ってきなさいよといって、また来てました。ハイ、どうもありがとうございますといって、こっちのおぼさんにね、わたし一人暗くてこわいから、おぼさん一緒にいきましようといって、ハイハイわたしもいきますよといって、おうちのおぼさんと二人で門まで行ってですよ、おぼ

その日は帰りますですよ。息子とあまり長いこと話はできないで、その翌日は高嶺にいった人と那覇の国場まで待ち合いますよ。といって、待ち合いですよ、また一緒に二人歩いてくるときに。国場で十時頃でしたかね。朝五時に面会したんですから、あまりながらくは面会時間はなくて。すぐ宿屋に帰って、すぐあと帰ったから。十時か十一時頃でしたかね。

三日間かかって行って、一時間くらい。

あのとき会っただけです。またうちの息子がよ、もうお母さん、兵隊はお金はいらないから、お金持っていてといいましたよ。お母さんもいらぬよ。お小遣いあったら何かおいしいの買ってあげたらいいよといったら、いいえ兵隊は何もお金もいらぬよからと、わたしにお金を二十円くれましたよ。那覇から帰る途中に。アイー、もうどこかなー、トラックでもあったらいいがねえと思つて、二人少し包みもって帰るときによ。ナカジミヤのサカちゃんに買ってましたから、アイ、グランチュミヤのおぼさんに似ている人が歩いているといつて車をとめてですよ、ええおぼさん、アイ、サカちゃんどこにねえといったら、今帰仁の仲宗根までですよ。といって、息子のイトコに当る方が、アイーよかつたねといって、サカちゃんの車に乗せてもらつて、仲宗根まで、その日のうちに帰つてですよ、よかつたねといつてもう忘れられないですよ。義夫さんは栄俊さんの息子さん。

息子は真勝といました。現役で最後の現役でした。あのとき会うたきりですよ。もう暗やみからみて気が済まなかつたから、空

さんはまた門から帰って、わたしは門に入っていて、息子はあっちにおるからといって。面会室がありましたかね。みな北海道の方でしたが、隊長さんなんか、入っていたら隊長さんなんかみなランプつけておつて地図もつておつて、おぼさんはどこですかといわれて、ずっと国頭郡の今帰仁村の今泊という部落ですよといつて。ああそうですか、あんな遠いところから、歩いて来たのつて、隊長さんが。ハイ歩いて来ましたよというたら、ああそうですかねといつて、あんな遠いところから、ああそうですかといつて。どうぞ、おぼさん息子と二人こっちで話でもしなさいよといって一部屋貸してですよ。息子と話すうちに、また兵隊さんがお茶なんか沸かして持って来たですよ、障子もありましたかね、山でみなつくて、仮小屋で、丸太を切つてつくつたんでしょ。周囲はみんな障子も作つて、面会するところは静かに。こっちで、息子と話をしなさいよといって。入つていって話をして。これは隊長さんにあげるんだから、これかたくなるんですよ、二、三日しておいたら。外間で泊つたとき、うちの人が話を煮ていたからよ、藪の上において蒸したから、おいしかったから、どうぞまずいものですけどおあがりなさいよといって、隊長さんにあげたら、この隊長さんがよ、これはもう、お母さんいいですよ、あんな遠いところから息子さんに持ってきたのに、こっちはいいですよ。いいえたくさんもつてきてあります、どうぞおあがりなさいよといったら、みんな火燃やしておたさ、大きなナベに焚火、一月、もう寒かつたから。ああこのお菓子は見たことのないお菓子だねえ、ちよつと火にあぶつたらおいしかつて、燃やしている火の上にあぶつてあげましたよ。

襲のときでもいって面会して、あれがおつたところは見たから、それだけでももういいと思います。

帰つてからは、うちは農民ですから、豚も牛も養っていましたから、きたらまた藪を掘つたり、クズつくつて、クズは乾燥して、保存食をつくりました。菜っ葉も乾燥して、もうあれしかなかつたから、また大麥つくつていましたからね、麦をついてインジュミー（はつたい粉）を作つて、こんなことで別の仕事はしませんでした。また心配して、今日また空襲くるかねえといつて、空襲きたら食物といつてないからねえ、自分たちで保存食をつくることを考えだして、どこからも教えられたのではありませんでした。メリケン袋がありますから、あれのパイくらい、四人家族でしたから、砂糖も自分で罐につめて、準備しておいてあったんです。大浦崎（米軍の収容所）にいくときにもみんなもつていって、朝なんかは飯は炊かないでね、いつも湯を沸かして砂糖とまぜて、ユーククして朝は食べて、ながいことありましたよ。

デークニバー（大根葉）なんかゆでて乾燥して袋につめたり、黒砂糖なんか大きなのを持っておつたらすぐ食べられないからと思つて、みな小さく切つてですよ、カンカンに詰めてね、そしたらすぐ食べられるからね。味噌と塩と砂糖といつも準備して袋につめてね。米軍が来た日はですね、伊豆味の方から志慶間川のずっと上の方から川づたいにおりて来ました。

宮里 わたしなんかワラビのミ、ウエバル、城址のむこう側の方、ウエバタにかかれていましたがね、アメリカが向こうのほうから来るよーという声が聞こえてきたから、こっち出身の人で屋宜

原のほうにいた人がですよ。あれなんかはあすこに上陸したので国頭のほうに逃げていたようですけど、このうちの幾人かはあれから引き返してきたり、ケガしたり、逃げたりして来た人がいました。ケガは空襲です。血がダラダラしたり、ゴロゴロ逃げて来た人もいました。防衛隊にいて、逃げた人が今生きています。孫市さんなんかケガして、今でも元氣です。あの人たちはケガしてきて、米軍が本部にはいるよというので、わたしたちはワラビ(羊歯)の中にかくれていました。今日は来るよーというのが聞こえてきました。あすこら辺の人も本部辺の人も、兵隊じゃないで、お母さんとか、年寄りとか、みな川伝いに下におりてきました。水のない川です。だから血ダラダラしてケガしてね。この人たちなんか今日はこっちに下ってきて、あすは上にあがってきて、避難民、ゴロゴロ歩いていましたけど、年寄りも女も子供もみんな、この人なんかみているから、わたしたちは逃げたんです。

三月二十三日からあれまでずっと毎日、あのときはずっと山にみながもっていましたが、本部のほうには今帰仁より早く上陸しましたよ。だからあれをみて流れてきたわけです。屋原の人はむこうにいったから。

ワラビの中にかくれていて、お砂糖もっていったから、子供が泣いたらこれをくれて、うちの明がまだ三つでしたよ。わたしは三名つれて、上が健一で十歳、喜久男が七歳。くるといつた日は、その二、三日前から、むこうの人たちはゴロゴロして、川の中をあつち行ったり、こっち行ったりしてましたから、そのくるという日は、この本部から流れてきた人なんかはどこへ行ったか、いなかっ

をアメリカがのぞいて歩きよかったですよ。わたしなんかはその塚がすぐみえるんです。そしたら一人の兵隊が鉄兜をかぶってユラユラした人が(木の枝で偽装している)塚に入りよかったですよ。この人は日本語が判る人で、ピラなんか持ってたんですけど、この人は日本語が判る人で、ピラなんか持ってたんですけど、その日はもう死ぬかと思いましたが、わたしは山にいないで羽地に行きなさいといつたそうです。わたしは山にいないで羽地に行きなさいといつたそうです。わたりまた下のほうにおりてきました。その日から空襲も何もありませんでした。そしてカナチャーというところに憲兵隊がいて、また、スク原一帯ミトバンナというところに部隊がありました。アメリカがおりたから、こっち(今泊)は収容所だから、憲兵隊がいて安心だから、誰かがみてきて、その晩からはシマは電気が明るくついて、アメリカに会ったらみんな手あげなさいよといつてね、手あげたらどうもしないから、備瀬の人もみんな襲撃で、農民の襲撃でいたらすぐやられるから、あれも捨ててー。

年寄から先におりたんです。また青年と女の若い人は、みんななかなかおりなかつたですよ。わたしは四、五日かくれていました。わたしは三十一歳です。玉城シズさん四十二歳でした。

うちに帰ったら、桃原、備瀬、伊江島の人が入っていたんですよ、そしてうちの塚にかくれて山にいましたけど、布団とかみんな盗られていました。着物もみんな盗られていたんです。食べ物もうちにかくれてみんな山へ行ったから、本部方面の人を捕虜といつてこの部落に連れてきて、食べ物もないですよ。伊江島の人たちもこっち来て一か月くらいしてからまた連れていかれたですよ。玉城 辺野古・大浦崎にいったのは六月でした。二十五日です。山

たですよ。そしたら本当にきましたね。わたしたちは山の上の方のワラビの中にかくれていましたけど、わたしたちのすぐ下の方でよ、休憩しましたよ。飯盒のガラガラするのなんか、英語でゴヤゴヤするのも聞こえてましたよ。こわくてよ、わたしは子供たちに砂糖食べなさいといつてすかして、こんなしていましたよ。みんなその付近にそれぞれかくれていました。わたしの主人の弟は姉さんのうちの塚にね、病気で重体だったですよ。けれどもうちにおられないもんだから、山の小屋に連れてきましたけど、小屋ではたまらなくなつて、あすこのうちはお父さんも病気でね、塚掘りきれなかつたですよ。だから自分のうちの塚といつて、あることはありましたが、むこうの方にやっぱ避難民がきましたから、あすこの家はクルナミというところにつくってありましたけど、病人も連れていくし、あすこにもおられなくなつて、姉さんのうちの塚はまた、大きかつたが、完全なものではありませんでしたが、担架も用意してました。炭焼ガマを利用した小屋をさがして、上は土しかおいてないから、不完全なものですよ。姉さんのうちの親戚みんないましたけど、照夫さんという人は中のほうに寝かせてあつたわけです。

それできょうは、アメリカが来るといつたので、誰も照夫さんを見る人がいないわけです。行こうというけど、あれひとり、わたしはいいからといって、お母さん行きなさいといつたから、おばあち、わたしたちみんなちりちりばらばらでひそんでるわけですよ。

そしたら上のほうからみえるんですが、照夫さんと主人のいる塚からおりてきて兼次学校に部隊がたくさんいましたからね、こっちは食べ物も何もなくて困っていますでしよう。大笑い話になりますけどよ、鶏、アヒルなんかわたしのうちに養つて卵うんでいましたからよ、山へ持つていったのをまた持ってきたアヒル、うちのおじいさんは諸ばかり食べたくないなあ、お肉も食べたいなああるからよ、ええ、あんたあつち行ったらお肉の罐詰と卵と換えるという話があるから、行つて換えてこないかというわけ、うちのおじいさんが。そういうから、うちの隣のウンジャミヤのねえさんと二人で、兼次学校にたくさんテント張つて部隊ありましたよ、隣のねえさんと二人でたくさん卵もついでよ、学校の門に行つてよ、門番がいましたから、前に行つて、言葉も判らないから、牛糞のことをこつちやつて(両手で角の真似をし、次に腕の肉をつまみ、両手で罐詰の大きな輪をつくるゼスチュア)、卵をみせて交換しようと言つたらよ、そうかといつて、すぐあつち走つていって、こんな大きな、こんな高さの牛糞もついでよ、卵と交換してよ、あのかの牛糞おもしろかった。交換してきたらうちのお父さんが喜んでですよ、また替えてきなさいよといつて。みんな「タクマ、アイン」(利巧者だね)といつてよ。

そのあとから、うちで、旧三月、四月は田植えの時期でしたから田を植えてですよ、稲をまいていって、こんな高くなつていきましたから、大浦崎にいて、また食べる物なかつたからよ、稲取りに来よつたよ。

何回か来ましたがよ、久志から食べ物とりに来るときは、齒も抜いて年寄り風にして羽地廻りして、山の中でよくアメリカと出会

いよりでしたがよ、年寄りと思って、入れ歯だったから、ふところに入れて、すぐ顔みて行きなさいといって。男の人はわざとボロを着て、縄の帯をしてヒゲもボウボウにして、女はナベの底のスミを顔にぬったりして、危いといって。

宮里 あすこにいて、シマに帰って何か食べ物とってこれる人は、少しはよかったですけど、わたしなんかのように、とりにいききれない人は配給で間にあわないですよ。他に何もないから、クズは少しありましたが、ホントに少しづつ子供たちと分けあって、持っていたクズも山にかくれた時の残りです。

玉城 食べ盛りの子供のいる家は命がけで蕎とったり、米とったり、久志からシマまで歩きました。

上間 田んぼにある名もわからない草までとって食べました。

玉城 わからない山道よ、山道から、わたしは憶えておつてね、四つ角いたら草を結んで、こちからきたというシルシ、またあつちいたら、またあつちで。山の中、小さい道はじめてですから、道から歩いたらアメリカに会うから、一回は明さんの家(古我知)に泊つてよ、わたし先頭になって、十人位組んで、みんな結んだ草を目当てに、川渡つたりして。

山からおりてくるとき、伊差川であるでしょう。伊差川の大通りに出るところのうちは竹藪があつて、遠くから目当てにしておいて、先頭になりましたから、みんなあとから追うて来て、アイナ、ヤードゥ、ヤカラエール(偉いね)といっていました。

測量士でさえ間違えよつたというのに、こんな小さい道で、木の

中ぐぐつていった。山の中ではマラリアはなかった。友軍はあつたすといつて、美人の娘をみたら人の中から引っぱり出していくのをみましたよ。そしたら今考えたら、一人はクリスチャンだったかねえと、いつでも思いますが、一人だけ、何とかかんとかいつて説得しているんですよ、ほかの兵隊を。こんなことしたらあとで大変よー、といつてなだめるのすぐ判るのよ、顔で。やがてこんなに抱いて連れていきよつたよ。この顔がケイレンするくらいショックでね、それで一人の兵隊がなだめて、そしたらようやく許して。もうそのあくる日にわたしなんかおきて来た。その頃、古我知なんか、毎晩、強姦する兵隊があちこち人のうちを廻っていました。あとは一斗カンですね、石油罐、あれみんな門のところに吊るしてね、早く来たうちが鳴らしたら、全部鳴らしたら、本部は田井等にあるからね、MPがすぐ、どこまでも聞こえるようになっていたんです。本当は敗残兵がないかというのだったかも知れませんがね、毎晩こんなでしたよ。人のうちこうしてミーグルグルして、MPが来たらまた逃げよつたよ。だからあれを考えた人はどこのいい人が考えたかねえと思ひよつたよ、あの一斗罐。うちのムラはやつぱり山のメーだから、古我知だったから。あの頃葉草園もありよつたです。避難民とわたしの家族とわたしの姉の家族とウンジャミヤの家族と八十人いました。わたしの屋敷に、一時はわたしの家の便所も、茅造りのあの便所も、もうたまらないでね、こんなに人ではわたしなんかたまらないで、もう、済みませんが便所だけは別に作つてもらふようにといつてお願いしましたが、ようやくあの人なんか自分で土を掘つて便所をつくっていました。この人たちは小祿の人たちでした。帰るときはみんな夜逃げするようにして、屋中は兄弟

そうですよ。マラリアはアメリカが来てからでした。羽地でもだ

551

いぶんかかっていますよ。上間 わたしは戦争前、十八年に結婚してあの当時は羽地にいました。結婚式はもうモンペで結婚式しました。羽地着くまで五回位おりて避難しましたよ。十八年、空襲がげいもんだから、わたしつれて一緒にあつちまでいった人なんかやつぱり飛行機が来たら避難するんですよ。本当の空襲はずつとあとですが、やつぱり飛行機きたら空襲といつて、十八年の十一月にわたし羽地にいきましたがねえ、モンペ姿で結婚式。モンペはもう普及していましたが、余りいいのがなかったから借りてしました。それで足袋もはかないで、あの当時は派手にするのがいけないといつて、今でも明ちゃん

はモンペ姿で結婚式したといつて。そのとき満で二十六歳でした。

馬車でいきました。あつちから荷馬車でわたしのうちに迎えにきました。ご馳走ももってくるから、花嫁を迎えに荷馬車で、あの当時は内地いく人も、名護まで馬車でいきよつたよ。一時はちょっと安心した生活しましたがね。実際に弾丸がぎだしたのは十月十日よりあとで、それも毎日ではなかった。たいがい三月、四月ころからはげしくなりました。羽地いって、地形が判らないから、何回山の谷底に落ちたか判らないですよ、夜なんか、避難中。

わたしの一番末の妹はきれいな娘だったから、避難小屋からこの娘一人必らず連れ出して、避難中みんなの中から、必らず兵隊が連れ出すといつて、友軍でなくてアメリカさんがよ、上陸してからこの娘一人だけこんなに囲んで、たいがいこの小屋に十人余り男女がいたから、全部が抱き合つて泣いて、お願いします、お願いします。みたいにしてるような人でも、日にちがたつていって、夜、お世話になつたというあいさつもなくて、みんな自分で帰りよつたの。でもやつぱり、この人なんかそうしないはずと思つた人なんか、とてもいいねいに、今は戦争のためだからといつて言訳けして、帰りよつたんです。ほとんどは夜寝ている間に帰つていきました。

玉城 うちらも着物と米と替えて食べよつたよ。浜に蕎もつていたら着物と替えて食べよつたよ。配給で間に合わないですよ。蕎も米も伊平屋からもつて来よつたですよ。

上間 わたしなんか中指くらいの指もつてきて、二十くらい掘つてきたら、家族ちゃんと三つづつか四つづつくらい、ちょっと皮むいてお塩ふつてよ、たいてね、みんなに配給した。

玉城 みじめでしたね。わたしなんかムイウムイウムのをとつてきてですよ、皮むいてウムニしたり、ジャビジャビしてよ、うちの子供たち、アイーまたウムニーレーサーして。

上間 うちなんかまだよかつたですよ。タタミの上で生活してましたがね。うちはソテツのクスでいたモチね、とてもおいしかったね。何ていうこのソテツのもち、アーシムチーうちとても好き。あれおもちの粉と混ぜたらおいしい。他には何もなくてクスチャンブルーつくつて食べました。あれの他に何もなくて、このムラで一家ほとんど一日中中毒で死んだのがおります。初次郎さんの家よ。

玉城 モービル油買いにいきよつたよ。みんなあの油、食べました。あれで天ぷらつくつて食べよつたがよ、臭くて、アイー。

モービル油を買いにいったとき、玉城で、あれは山からおりて、久志にいかない前に、油も何もなかったから、モービル油を買いにいった。友軍の運天にあった部隊(石嶺隊)に。

天ふら焼こうにも臭くて、舌さすさ。みかんの葉なんかいれたら臭くないといってよ。油が、玉城にもあるという話がありましたから、玉城に買いに行く途中、キビ畑のそばに、友軍にやられたといっただけでムシロおおうてありました。あのかたはアメリカといっただけで、友軍にやられたといっただけで、アラガキという人。死んでね。イエー、ウンチューエーナー、ユーン、ネル、イラッタンディドゥーヤー(あのねえ、この人はもう可哀そうに、友軍に射られたんだってよ)といっただけですよ、ムシロおおうてキビ畑のそばに倒れておったんです。それは渡喜仁でやられてからです。渡喜仁でもやられたんです。ジャハナ。あの人は無茶苦茶だったとねえ。何回も刺されていたというのに、友軍に。あの長田さんも何回も逃げてきたって。ここはMPがいたから、今泊ではなかった。みなスパイというて。あの人はいい人だったとねえ。あの方は兵事係で役所に勤めていましたよ。殺された時は区長だったそうです。

## 乳呑児と老人をつれて

今帰仁村越地 上 間 カ ナ (二十七歳) 主婦

十月十日の空襲の時はこっちは運天港が近かったです。むこうが石部隊で、海軍が警備していました。魚雷艇とか、運天港の方か

上陸してからはずっともう防空壕生活でした。上陸しない前は空襲は朝から晩まで、何回となく続いたもんで。余り長いことじゃなかったんです。たとえ戦場じゃなくてもひどかったんです。空襲はひっきりなしにあって、それで防空壕生活をしました。

十日か二十日近くお家へいったり来たり、歩けるものは明日の食事の準備したり、動けない者は年寄とか子どもたちの面倒みさして、動けるものは出て食糧とったり、準備したり。ご飯はなくてお膳でした。米があっても精米にもいけないのでお家でこれやったり(手で臼をひく動作をする)夜しか出来ませんでした。上陸寸前になってから艦砲射撃とか照明弾とか、今になって思えば照明弾は番号とか照らすだけということは判りますが、そのときはそれが飛んでくるんじゃないかと思って一メートル位のがけを五十キロもある荷物をもったまま飛びおりました。怪我もせず、今でも珍らしいと思います。

その頃は海の方の防空壕にはおじいちゃんをおき、山の方へは部落の人たちのところへ乳呑み子をあずけていたので、昼間は山、日が暮れてから家へ帰っておじいちゃんの弁当をつくって食事をつくり、海の方の防空壕へいって十時過ぎになり、それからまた月のときもあつたり、手さぐりでいったりして山の方へ登ると十二時になりました。

おじいちゃんにはお砂糖と油味噌、一升ビンに水入れて便器と用意してくるので、夜いって洗物なんかやって、そこにはおじいちゃんとおばあちゃん(八十九歳)と二人でしたが、上陸してきてお家へ上つてきて、捕虜とられて行くときにわたしはおじいちゃん

ら出ました。それで今の中学校敷地(今帰仁中学校)が北部製糖で煙突なんか立っていたもんで、運天港から今の中学校が目隠にされてひどかったんです。こっち(越地)の方は何も、大して被害はなかったです。機銃掃射はありました。お家焼かれたり、親戚みんな待機しておいて屋根の上に柴を準備しておいて、梯子じゃなく、丸太なんか準備しておいて、棒立てて、まわりに縄をはり丸太から登っていきけるようにして。こっちら六軒目位の家、二十年の三月だったと思うけれど、機銃で焼かれました。そこら辺に避難していた人たちは全部こっちに移りました。女子組から、年寄りまで。こっちはいっぱいでした。宮里さんの家は大きなお家でしたけど、機銃でみんな焼かれました。女は防空壕にいき、男は別の壕の中から飛行機をみていて消火に当たったりしましたけどね。それでこっちはまぬかれたんですよ。久吉屋とうちは。他の部落はもっとひどかったかも知れないけど、うちの部落は運天港から遠かった関係で、たいしたことはありませんでした。西方面はまた伊江島の基地があったので本部あたりはひどかったんじゃないかと思えます。自分たちの状況しか判りません。

年が明けるまでは屋敷内にも防空壕があって、空襲がひどいときにはまた、共同で三、四十名収容できる位の壕を山のふもとに掘って、むこうの水を頼って生活出来るようにして、お家から夜も昼も生活できるようにしてありました。海の方のうちの山にありました。空襲警報はサイレンで知らせました。いざ上陸寸前になって家に帰れなくなってからは夜も昼も子ども、年寄りは防空壕に寝泊りさせる状態になりました。

その頃亡くなられて幸いですと思いました。

上陸してきてじき亡くなられたもんだから。生きていたらどこへ連れていかれたか判らなかつたからです。ちゃんとお葬式もして、ちょうど比嘉さんところにスペイン語を話されるおじいちゃんがいらしたので納棺してから米軍に事情を話して許可を得て、米軍が出動する前か夜になってから葬式やるつもりだったけど、危くて、もし、人が多勢で歩くの不審に思われたら危いからというんで、そのおじいちゃんに頼んでいたら、とてもきれいなお葬式ができましたけどね。納棺してむこうが三人ほど来て確認して手を合わせてもらって、みんな行かなかつたら、ちらばっている米軍もみんな葬式に出なさいといっただけ集まって。そしたら字民あとでみんな後悔していましたけどね。こっちらは親戚だけでした。土葬でした。埋葬したものの、大きい墓でしたから後で開けられて、おばあちゃんはまだ洗骨してなかつたんだけど、棺桶外に出して朝早く骨拾って、もし蓋したらまた開けられないからと、蓋はしないでおきました。すぐ近くに娘の墓がありましたがおじいちゃんの望みだったもので、そこに入れました。八十八歳のおばあちゃんはどこに捕虜されて連れ去られたか判らないで、今だに判りません。それ考えた場合一。

久志にも判らない人がたくさんいました。年寄りは片っぱしから集めて、家族は最初に連れていって年寄りは後に残って、我を張って家族のいうことは聞かないで、森を離れたがらないで後でどこへいったか判らないのです。家族は羽地にいって、おじいちゃんやおばあちゃんは久志に連れていかれた人もあるし、わたしの知ってい

るおばあちゃんも、久志で二、三日木の下でいらしたけど、それからまたどこへ連れていかれて、あとは判りません。八十八歳のおばあちゃんも久志に連れられていったらうちも判ったんですけれど、どこに連れていかれたかいまだに判りません。運天さんところのおばあちゃんも久志でうちらが見たんだけど、作業に行く前にみて、確かに運天のおばあちゃんだけど、あの人は牛肉なんか嫌いでしたが、牛糞が多かったのを、誤解心が強いわけよ、年寄り。それでこんなの食べさせて殺すつもりではないかと、自分が嫌いなのを食べさせて殺すつもりではないかと、全然食べないで栄養失調になって、どこに連れていかれたか判らないのです。

わたしたちはやっぱし、友軍でも米軍の本当の心境というものが判らなかつたんじゃないかと思う。というのは、敗残兵が山から、屋は逃げかくれして、夜は部落におりてきて、おりて来た場合には住民として日本軍の面倒をみましたかね。負傷している方もいるし、治療してあげたりメシたいてあげたり、こうして状況聞いたり誤解したりいろいろのことであんな犠牲者も出したのだと思う。謝花喜睡さんとか。それがスパイであるという本当の証拠はつかまないで、ただ人のうわさとか、自分たちが助かるためには、自分たちは上陸したときには殺されるとばかりと思っていたが、それがそうではなかつたわけですね。先鋒隊なんかとても温かくして子どもたち年寄りをみてもらったりしたもんで、次第次第に気持が判り合ってくるようになって。配給をくれたり、こんなのを友軍が山からおりて来て見たり聞いたりして、アメリカさんとチャホヤしたりした人たちをちょっとうらみ目でみて、こういう目にあわれた方が多い

にも責任はあるので、山にいた部落の人と別れるハラを決めたのも若いし責任があるし、ということでした。

おしゅうとさんは五十幾つで長女が十歳で、自分の着替えと食糧少々をリュックサックに背負わせて吉夫を連れて歩きました。長女は他人の子たちよりはよくやったのです。その当時十歳で久志から羽地までね、和子おぶって一緒に最後まで。おじいさんは決った防空壕にいさせてもらって。それから米軍が上陸して来て、たちの悪いアメリカさんたちが来て、若い娘さんたちに暴行しようとして、この人たちが帰ってからも、この壕にいては大変だということまで全部出て、おじいさんとおばあさんだけ残してからみんな出ましたけど。三十日の昼、それからあくる日は、向いの山に、夜の明けるまでに食糧を準備して宿替えした。わたしは、裸になってから、頭に荷物乗せて、潮満ちているでしょう。満ちていようが、ひいていようがもう変らないわけ。夜といっても、夜明けなかつたら道があぶないし、夜が明けてからいったんだけど、食糧の確保だけでも、大変なことだったし。わたしらが困ったのは、子どもが幼ないということと、年寄りがいたということ。動けるのは、うちとお姑さんふたりだけ。

長女が十歳で三年生のトシにはなっていますが、学校は井上部隊一友軍が兵舎にしていますので学校もろくに出ていないんです。部落から炊事班が出て、娘さんたちはもう、みんな炊事に。子どもは空襲始まってからはろくに学校行ってないです。一日壕掘ったりがあって、家には乳のみ子がおったんですけど、それでも午後からでも連れて行かれましたから、陣地掘りに。年寄りと動けない病人

んです。

自分たちも何とか生きながらえるためには、手真似足真似で気持を通じあいました。それで米軍は辞典なんかも持って歩いていました。やっぱし言葉がちがうだけで。首里辺りで戦ってこちらで休養にくるということを辞典で話しておりました。うちの和子が乳呑み子でオッパイあげるのに困りましたけど、兵隊たちは休養しているで、自分たちの子どもや妻を思い出しつてベビーなんかみて抱きたがるわけなんです。それがこわくて。

ベビーが三名いて、ワイフがいて、ユラユラ乗って帰ったら抱きたいと辞典で話していました。和子が誕生過ぎてヨチヨチで可愛いかったんで、アメリカさんがとても上手に歩かせてくれたんです。ある日は借しなさいと連れていったが、わたしはこわくて、隠れてオッパイあげたりしていました。自分の天幕に連れてって食糧あげたり、十歳位の子に自転車に乗せたあと食糧あげたりして連れて来ました。住民と仲良くしました。

日本軍はそれを夜みたり聞いたり、また他の人が話しているのを聞いたりするので、それから次第に、アメリカとチャホヤする人はスパイとしか見なくなつて、それであのような事件が起きたのだと思えます。

家と、海の防空壕と、山の方と、三重生活だったので。他の家は馬とか男の人も担げるだけ担いだら三、四日の食糧も担げるでしょう。うちはおじいちゃんの面倒をせひみなければいけないもんだから、他の人はうちのような苦勞はしなかつたんじゃないでしょうか。若かつたから出来たんだと思います。おじいちゃんにも子どもたちだけしか残さないで。主人は兵隊に連れていかれるし。

家で働くのはわたしひとりしかいないですけど。それに乳呑み子を持たながら。家族廻りして人集めにきよつたんです。それは兵隊ですが、いくら国のこととはいいながらも部落におりて、人を集めるということ、二時間しか仕事は出来ないでしょう。遠いところ歩くその道中が時間つぶしで、仕事するという時間がないわけです。四、五名、十名も、おりて部落に人を集める時間では、大男たちが女の倍も仕事は出来る筈だとは思いました。弾がとんでくる心配以上に生活のことが心配で。家畜も多かったが、次第次第にも面倒みきれなくて、捕虜となるときに全部野放しして、それで財産というものは全部なくなるわけ。着のみ着のままで出てしまつて。住民も全部戦争犠牲者です。軍人だけの戦さでしたら考える余地もあるけど、その戦地になったところが、兵隊であろうがなからうが犠牲にはなるし、財産はなくなるし、わたしら戦前までは、篤農家といって字でも一、二番に入るぐらいの農家でしたが、それが終戦直後になったら、どん底に落ちてしまつて。

主人は十九年の六月に召集されて、佐世保に六月十五日に召集された。姪の子と同じ日に入隊でした。姪の子は海軍志願して送り出す覚悟でいたんだけど、主人も急に召集が来てハツとなつたもんでオッパイはあがるし、和ちゃんはオッパイがないし、壕生活はするしで、とても病弱で、三、四歳ぐらいでしか健康と戻せなかつたです。主人は二十年の四月十六日戦死という公報が来ています。伊江島です。はじめ佐世保行って、からだの具合が悪いといつて帰されて来ているのに（七月の下旬ごろ帰つて来ています）また動員令

で伊江島行って、それから帰ってきて字から班長として日本軍の仕事をしていた。兵隊と同じ行動をして、作業班長として。くわを取って働ける人は全部させられた。

役所の兵事係が、一時間前に来て（動員令で）御飯一杯もやれないでそのままやるくらいだった。それから二月上旬、おじいさんが還暦のお祝いがあつたし、和子の誕生日だからそのときは、何か理由つけて、暇もらって二日程来ていました。それが最後だったんです。最後に三月に入ってから防空壕で書いたんでしょね、走りペーンで本部に勤務している人につけてあげました。それが最後の手紙だったんです。

二十年の六月の半ばごろ、わたしたちはみんなと一緒に連れていかれました。久志ではわりあい米軍がきびしくなかったんで、ほかの人は夜なんか今帰仁や羽地の方へ食糧とりに出かけていました。わたしは小さい子どもがいるので不便でしたが、七月か八月ごろ、羽地の親戚から、くるようにさそいがありました。それで我部祖河の親戚をたよっていくことにしました。許可するところもないので、夜、米軍の目をぬすんで、収容所を出ました。久志から羽地まで九里のみちのりなんですよ。その間の山の中に、友軍がいるんですよ。一升おにぎりにして道中で食べるというって持って夜明まで山に入りました。兵隊が山に来るまでにはもう羽地の部落近くまで行っておったです。それでまた晩、帰る時分には山をいったりきたりしました。その間には、山に友軍がいくらでもいるんですよ。おにぎりは半分しかありませんでした。途中の友軍にとられるというよりあげたんです。一番要求するのは、マッチと塩でした。自分の主人

たちが、どこでこういう目に合っているかと、おしみなく、自分たちはひもじくつてもおにぎりなんかみんなあげて、食べられるものみんなあげて、自分たちはまた来たたら親戚が食事つくって待っていてくれるので食べよつた。正秀と吉夫はおじいさんが来たときに連れてもらつて、おばあさんだけ残して。親戚にいろいろ面倒見てもらつてこうして生きのびて来ました。